國文雲抄 徒然草

特2-4E
772

始

特246
772

中等國漢文研究會編

國文
要抄
徒然草

東京 西東社出版部

昭和八年 帝國圖書館

序

國語の受驗準備書として何を讀むべきかといふことは、しば〳〵質問されることであるが、これについては、二つの方面があると思ふ。卽ち一は、各種の原本から文の要所を拔萃して、これを最も系統的に配列した、所謂問題集であつて、編者がさきに絕大の好評を得た「近古近世文」「近世擬古文」「現代文」「古文現代文」「新國語問題」等がそれである。他の一は、或一種の原本を本とし、その要所を抄出し、而もそれによつて一貫したる原本の內容を把握し、行文の特長と要語の用法とを理解せしめんとするものである。例へば「增鏡抄」「徒然草抄」「玉かつま抄」の類である。

然るに後者については、編者はこれまで編纂の暇をもたなかつたが、今夏幸にその機會を得て、この類の刊行を企圖した次第である。

從來この種の刊行物はかなり多數に上つてゐる。しかし、或は繁に過ぎ或は簡に失し、內容通觀の便はあつても、試驗問題としての要所を逸して適當ならざるものが多いのは、甚だ遺憾とするところである。

本書は上述の如き既刊書のあらゆる缺陷を是正し、形を制して取扱に便じ、量を定めて讀了を期し、又或程度まで豫習復習の伴侶たり得るやう卷末に語釋を附して古文要語の理解に遺漏なからんことを圖つた。

讀者此の趣旨を諒解せられゝば甚だ幸である。

昭和八年九月

編者しるす

凡例

一　本書は中學校・高等女學校の高學年並に補習科に於ける副讀本・受驗準備書として編纂したものである。

一　本書は原本の內容を通觀し、併せて國語解釋力を涵養せんことを期した。この趣旨から、原本二百四十三段中、要所六十段を選拔した。

一　各段とも分節毎に一行の空所を置いた。これは讀み易からしめん爲と、一面には、一分節を一問題と見做して練習し得る便宜あらしめん爲である。

一　本文上欄には、固有名詞に略註を施し、引用句の出典を示し、且本文中の要語を揭出して特に讀者の注意を喚起することを期した。

一　附錄として語釋を添へた。多くは本文上欄に揭出した要語の略解である。特に句意文意等の詳註を加へることを避けたのは、本書が自習書參考書ではなくて、敎室に於て使

用すべき教科書なるが故である。

一　國文要抄叢書第一期として本書の外に「增鏡」「玉かつま」がある。一ヶ年間の準備書としてこれら三種の量を最も適當と信ずる。順次讀了せられゝば、十分なる解釋力を涵養し得るであらう。

徒然草解題

徒然草は吉田兼好の隨筆である。內容は自然人事にわたり、描寫あり、感想あり、趣味あり、教訓あり、實に彼が生活の全面にわたる。その思想的根柢は、佛教の無常觀を中心とし、老莊の所說と儒學の教理とを混淆してゐるやうに見える。

徒然草は、枕草子の系統に屬するものであり、相並んで我が國隨筆文學の双璧であつて、古來最も愛讀せられたものの一つである。從つてその註釋書も古來甚だ多く、實に數十種に上るであらう。

徒然草の編次に關して、伊勢貞丈は次のやうに說いてゐる。「今川了俊、命松丸を吉田の感神院へ、伊勢太郎光貞を伊賀の草庵に遣して、危好の遺物を探らしめしに、歌の集は伊賀の草庵にて五十枚ばかり集め、從然草は吉田にて多く壁に張られ、或は經卷などを寫せる裏書にありしを取來りぬ。これを了俊、命松などと取揃へ、命松丸が許にありしをも、

又二條の侍從の方に讀み遣はされしをも取集め、歌の集二冊とし、又草子をも二冊とせるなり。つれ〴〵なるまゝにと書出せし語意の面白く哀深きになぞらへて徒然草といふ題號はりつけられたり」

執筆の年代に關しては明かに知り難い。思ふに、本書は「つれ〴〵なるまゝに」筆を取つたもので、或一定の期間に書上げたといふ性質のものではないから、相當の年月を費したものであらう。或說には、建武中興の前後に執筆したものであらうと推定されてゐる。編纂の時期は、貞丈の說に從へば、了俊が編纂したといふのであるが、若しさうだとすれば、了俊の歿年應永二十七年以前であるわけとなる。

兼好は卜部氏、兼顯の第四子である。洛東吉田の地に住んだので之を姓としたのである。後宇多上皇に仕へ、その寵遇を得て左兵淸尉に任じたが、正中元年上皇の崩御するに及び哀悼やる方なく、遂に剃髮して修學院に入つた。後木曾に遊び、此處に暫しの草庵生活を營んでゐたが、

こゝもまた浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな

と詠じて再び京都に歸り住んだ。

嘗て己の葬地を洛西雙岡にトし、櫻花を植ゑ、自ら詠じて曰く

ちぎりおく花とならびの岡の人にあはれ幾世の春をすぐさん

晩年伊賀の國見山麓に居をかまへ、正平五年二月こゝに寂し、その地に葬つた。(高野山西光寺の位牌には四月八日とあるが、今姑く園太曆の記述に從ふ)

兼好は佛徒であつたけれども、つひに超俗的な大悟徹底の人ではなかつた。あくまでも現實に生きた人であつた。從つて彼は圓滿な常識的の人であつた。佛敎を說いても、人生觀を述べても、そこに幽玄な敎義もなく、深遠な哲理もない。つまりは彼の常識から出たのである。又彼はいつも物の兩面を見ることを忘れなかつた。彼の處世談や敎訓が實際的であつたのは、上述の理由によるのである。又兼好は一面豐かにして洗練された趣味に生きた人であつた。古を重んじ平安朝趣味にあこがれて、事每に田舍物の惡趣味を罵つたの

も、要するに彼のかうした生活態度によるものである。當時頓阿・淨辨・慶雲らと相並んで和歌の四天王と呼ばれ、

手枕の野べの草葉の霜枯に身はならはしの風の寒けさ

の詠によつて手枕の兼好といはれた。兼好法師集はその歌集であるが、しかし兼好は歌人として必ずしも有數の人ではなかつた。卽ち兼好に天才的な詩人の素質は求められないのである。兼好にとるところは、やはり隨筆徒然草であらねばならぬ。

國文要抄

徒然草目次

一　つれ〴〵なるまゝに……一
二　いでやこの世に……一
三　不幸に愁に沈める人……三
四　あだし野の露……四
五　家居のつぎ〴〵しく……五
六　神無月の頃……七
七　同じ心ならん人と……八
八　和歌こそ……九
九　いづくにもあれ……一一
一〇　人はおのれをつゞまやかにし……一三
一一　をりふしのうつりかはるこそ……一三
一二　飛鳥川の淵瀬……一六
一三　しづかに思へば……一八
一四　人のなきあとばかり……一九
一五　雪のおもしろう降りたりし朝……二一
一六　朝夕へだてなく……二一
一七　五月五日賀茂の競馬を……二三
一八　春の暮つ方……二三
一九　あやしの竹の編戸の内より……二四
二〇　ある人清水へ……二五
二一　老來りて始めて……二六
二二　仁和寺にある法師……二七
二三　これも仁和寺の法師……二七
二四　久しく隔たりてあひたる人……三〇
二五　人の語り出でたる歌物語……三一
二六　大事を思ひ立たむ人……三一
二七　名を聞くより……三三
二八　世に語り傳ふること……三五
二九　世のおぼえ花やかなる……三五
三〇　世の中にその頃……三六

○つれ〴〵
○日ぐらし
○ふしなし
ごと
○そこはか
となく
○物ぐるほし

○いでや
○めれ
○やんごと
なき
○一の人
○たゞ人

徒然草

一　つれ〴〵なるまゝに　（序段）

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ。

二　いでやこの世に　（第一段）

いでやこの世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。みかどの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまは更なり、たゞ人も、舍人など賜はるき

目次

三一　今やうの事どもの……三七
三二　何事も入りたゝぬさましたる……三七
三三　屏風障子などの繪……三八
三四　法顯三藏……三八
三五　ある人弓射ることを……三九
三六　高名の木のぼり……四〇
三七　宿河原といふ所にて……四一
三八　寺院の號……四三
三九　人の才能は……四三
四〇　ものに爭はず……四四
四一　花はさかりに……四六
四二　家にありたき木……四九
四三　身死して財のこるは……五一
四四　心なしと見ゆるもの……五三
四五　能をつかむとする人……五四
四六　ある人のいはく……五五
四七　世にしたがはむ人は……五六
四八　一道にたづさはる人……五七
四九　年老いたる人の……五八
五〇　さしたる事なくて……五九
五一　相模守時頼の母……六〇
五二　よろづの道の人……六三
五三　けふはその事を……六三
五四　達人の人を見る眼は……六三
五五　秋の月は……六五
五六　平宣時朝臣……六五
五七　よろづのとがあらじと……六六
五八　人のものを問ひたるに……六七
五九　ぬしある家には……六八
六〇　丹波に出雲といふ所……六九
語釋……一―二

目次終

○ゆゝし
○はふれ
○いみじ

はは、ゆゝしと見ゆ。その子うまごまでは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つ方は、ほどにつけつゝ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

清少納言枕草子の作者。

○ひたぶるの
○なか〳〵

法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。「人には木のはしのやうに思はるゝよ」と、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛にのしりたるにつけて、いみじとはみえず。増賀ひじりのいひけむやうに、名聞ぐるしく、佛の御教に違ふらむとぞおぼゆる。ひたぶるの世捨人は、なか〳〵あらまほしきかたもありなむ。

○あいぎやう

人はかたちありさまの優れたらむこそ、あらまほしかるべけれ。ものうちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、言葉多からぬこそ、あかずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えむこそ、口惜しかるべけれ。しなかたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにもうつさばうつらざらむ。かたち心ざまよき人も、ざえなくなりぬれば、しなくだり顔にくさげなる人にもたちまぢりて、かけず、けおさるゝこそ、ほいなきわざなれ。

○心劣り
○しな
○ざえ
○かけず
○けおさる

ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道。また有職に公事の方、人のかゞみならむこそ、いみじかるべけれ。手などつたなからず走りかき、聲をかしくて拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそ、をのこはよけれ。

○まことしき
○いたましうする

三　不幸に愁に沈める人　（第五段）

○ふつゝか
○思ひとる
○さる方

不幸に愁に沈める人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなくあかしくらしたる、さる方にあらまほし。　顯基の中納言のいひけむ「配所の月罪なくて見む」こと、さもおぼえぬべし。　（第七段）

あだし野
京都嵯峨にあつた墓地。
鳥部山
京都東山にある。古火葬場があつた
○住みはつ

四

あだし野の露消ゆるときなく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住みはつるならひならば、いかにもののあはれもなからむ。　世はさだめなきこそいみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。　蜉蝣のゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。　つく〳〵と一とせをくらす程だにも、こよなうのどけしや。　あかずをしとおもはば、千とせを過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。　すみはてぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせむ。　命長ければ恥おほし、長くとも四十にたらぬほどにて死なむこそ、めやすかるべけれ。

○こよなう
○めやすし
○さかゆく
○あらまし
○あさまし

そのほど過ぎぬれば、かたちを愧づる心もなく、人にいでまじらはむことを思ひ、夕の日に子孫を愛し、さかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみふかく、物のあはれも知らずなりゆくなむあさましき。

○つき〳〵し

五

家居のつき〳〵しく　（第十段）

家居のつき〳〵しくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あ

るものなれ。よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひときはしみ〴〵と見ゆるぞかし。

今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔おぼえて安らかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

○今めかし　○たより　○うちある　○おぼえ　○心にくし

多くのたくみの、心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで、心のまゝならずつくりなせるは、見るめも苦しく、いとわびし。さてもやは長らへ住むべき、また時のまの煙ともなりなむとぞ、うち見るよりも思はるゝ。大かたは家居にこそ、ことざまは推しはからるれ。

○えならぬ　○わびし

後徳大寺の大臣の、寢殿に鳶居させじとて、縄を張られたりけるを、西行が見て「鳶のゐたらむ、何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや縄を引かれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや「烏のむれゐて、池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給ひてなむ」と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。徳大寺にも、いかなる故か侍りけむ。

後徳大寺　藤原實定。

綾小路宮　龜山天皇の皇子性惠法親王。

○まことや

六　神無月の頃　（第十二段）

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の

栗栖野　山城宇治郡。

○さすがに　○たわゝ　○ことさめ

葉に埋もるゝ筧の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

七　同じ心ならむ人と　（第十二段）

○しめやか　○うらなく　○ものから

同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなくいひ慰まむこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらむとむかひゐたらむは、ひとりある心地やせむ。互にいはむほどのことをば、げにと聞くかひあるものから、いさゝか違ふところもあらむ人こそ、「われはさやは思ふ」など爭ひにくみ、「さるからさぞ」とも、うち語らはば、つれ〴〵慰まめと思へど、げには少しかこつ方も、われとひとしからざらむ人は、大かたのよしなしごといはむほどこそあらめ、まめやかの心の友には、遙かに隔りたるところのありぬべきぞわびしきや。

○かこつ　○よしなしごと　○ほどこそあらめ　○まめやか　○わびしき

八　和歌こそ　（第十四段）

○をかし　○山がつ　○ひとふし

和歌こそなほをかしきものなれ。あやしのしづ山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪のしゝも、ふす猪の床といへばやさしくなりぬ。

このごろの歌は、ひとふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、

○いかにぞや
○けしき
○ならなく
絲による云云
古今集に「絲によるものならなくに別れ路の心細くもおもほゆるかな」
殘る松云々
「冬の来て山もあらはに木の葉降りの殘る松さへ峰にさびしき」
家長
源家長。
○いさや

古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばのほかに、あはれにけしきおぼゆるはなし。貫之が「絲によるものならなくに」といへるは、古今集の中の歌屑とかやいひ傳へたれど、今の世の人のよみぬべきことがらとは見えず。その世の歌には、すがたことば、このたぐひのみ多し。この歌にかぎりて、かくいひたてられたるも、知りがたし。源氏物語には「ものとはなしに」とぞ書ける。新古今には「殘る松さへ峰にさびしき」といへる歌をぞいふなるは、まことに少しくだけたる姿にもや見ゆらむ。されどこの歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰せ下されけるよし、家長が日記には書けり。

歌の道のみいにしへにかはらぬなどいふこともあれど、いさや。今もよみあへる同じことば、歌枕も、昔の人のよめるは更に同じものにあらず。やすくすなほにして、姿も清げにあはれも深く見ゆ。梁塵秘抄の郢曲のことばこそ、又あはれなることは多かめれ。昔の人は、いかにいひすてたることぐさも、皆いみじく聞ゆるにや。

○ことぐさ
梁塵秘抄
平安朝時代の歌謡集。

九　いづくにもあれ　（第十五段）

○目さむる

いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ目さむる心地すれ。そのわたり、こゝかしこ見ありき、田舎びたるところ、山里などは、いと目なれぬ事のみぞ多かる。都へたより求めて文やる「そのことかのこと、便宜に忘るな」などいひやることをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺・社などに忍びて籠りたるもをかし。

○心づかひ

○つゞまやか

計山　帝堯時代の隱士。

○さゝげ

○かしがましし

○むすび

○ふすま

人はおのれをつゞまやかにし　（第十九段）

らむぞいみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。

もろこしに許由といひつる人は、更に身にしたがへる貯もなくて、水を

も手してさゝげて飲みけるを見て、なりひさごといふものを人の得さ

せたりければ、ある時木の枝にかけたりければ、風に吹かれて鳴りける

を、かしがましとてすてつ。又手にむすびてぞ、水も飲みける。いかば

かり心のうちすゞしかりけむ。

孫晨は冬の月にふすまなくて、藁一束ありけるを、夕にはこれに臥し、朝

ものゝあはれ

拾遺集に「春はたゞ花のひとへに咲くばかりものゝあはれは秋ぞまされる」

○さるものにて

○けしきだつ

花橘云々　古今集に「さ月まつ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする」

には收めけり。もろこしの人はこれをいみじと思へばこそ、記しとゞ

めて世にも傳へけめ、これらの人は、語りも傳ふべからず。

一一　をりふしのうつりかはるこそ　（第十九段）

をりふしのうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ。「もののあはれ

は秋こそまされ」と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひと

きは心も浮き立つものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲なども、こ

とのほかに春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萠え出づる頃より、

やゝ春深く霞みわたりて、花もやうやうけしきだつ程こそあれ、折しも

雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、

よろづにたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の

にほひにぞ、古のことも立ちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹の

清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすてがたきこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人のこひしさもまされと、人のおほせられしこそげにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水鶏のたゝくなど、心ぼそからぬかは。みな月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。みな月祓またをかし。

灌佛　四月八日の佛生會。
祭　四月中の酉に行はれた賀茂の祭。
みな月祓　六月晦日に行はれた大祓。

たなばた祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、とり集めたること は秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、皆源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じことまた今更にいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ。あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

なまめかし
ことふり
おぼしき
あぢきなき
すさび
かいやる

さて冬がれのけしきこそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うおける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けくすめる二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。御佛名・荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取り重ねてもよほし行はるゝさまぞ、いみじきや。

をさ〳〵
すさまじき
御佛名　十二月十九日から三日間禁中で行はれる佛事。
荷前の使　十二月吉日を選んで朝廷から十陵八墓に幣帛を奉られる使。
いそぎ

○ことゞく　しく

追儺四方より拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜、いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門たゝき走りありきて、何事にかあらむ、ことゞくしくのゝしりて足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。なき人の來る夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほすることにてありしこそ、あはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、きのふにかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそまたあはれなれ。

一二　飛鳥川の淵瀬　（第二十五段）

飛鳥川　大和國高市郡にある川。古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」

京極殿　藤原道長の邸。

法成寺　道長の建立。

○御ぞう　○うしろみ　○あせ　正和　花園天皇の年號。

無量壽院　法成寺の一部。

○かた

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしびゆきかひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰とともにか昔を語らむ。まして見ぬ古のやんごとなかりけむ跡のみぞ、いとはかなき。

京極殿・法成寺など見るこそ、志とゞまり事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿のつくりみがかせ給ひて、庄園多く寄せられ、わが御ぞうのみ、みかどの御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならむ世にもかばかりあせはてむとはおぼしてむや。大門・金堂など、近くまでありしかど、正和の頃南門は燒けぬ。金堂はその後倒れ伏したるまゝにて、とりたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて殘りたる。丈六の佛九體、いとたふとくてならびおはします。行

成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂などもいまだ侍るめり。これもまたいつまでかあらむ。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから礎ばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば、よろづに、見ざらむ世までを思ひおきてむこそはかなかるべけれ。

○すさび
○したゝめ
○やりすつ

一三　しづかに思へば　（第二十九段）

しづかに思へば、よろづ過ぎにし方のこひしさのみぞせむ方なき。人靜まりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘しおかじと思ふ反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心もなくて、かはらす久しき、いとかなし。

○うつろひ

一四　人のなきあとばかり　（第三十段）

人のなきあとばかりかなしきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしくせばき所に、あまたあひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたゞし。日數の早く過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいとなさけなう、たがひにいふこともなく、われかしこげに物ひきしたゝめ、ちり〳〵に行きあかれぬ。もとの住家にかへりてぞ、更に悲しきことは多かるべき。

○ひきしたため

○あなかしこ
○うたて

「しかじかのことは、あなかしこ、あとのため忌むなることぞ」などいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心はなほうたておぼゆれ。

○うとし
○よしなしごと
○けうとき
○さるべき
○ことゝふ
○よすが
○さるは

年月經ても、つゆ忘るゝにはあらねど、去るものは日々にうとしといへることなれば、さはいへど、そのきはばかりはおぼえぬにや、よしなしごといひて、うちも笑ひぬ。

骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかりまうでつゝ見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木の葉ふりうづみて、夕の嵐、夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。思ひ出でてしのぶ人あらむほどこそあらめ、そも又ほどなくうせて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらむ人はあはれとも見るべきを、はては嵐にむせび、し松も、千年を待たで薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。そ

○かた
○がり
○ひがゝし
○ともある時
○心おき

のかただになくなりぬるぞかなしき。

一五　雪のおもしろう降りたりし朝　（第三十一段）

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと何ともいはざりし返事に「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどのひがゝしからむ人の仰せらるゝこと、聞き入るべきかは。かへすゝもくちをしき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりのことも忘れがたし。

一六　朝夕へだてなく　（第三十七段）

朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時に、われに心おき、ひきつくろへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、な

○げに〳〵しく
○うとき

ほげに〳〵しく、よき人かなとぞおぼゆる。うとき人のうちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

一七　五月五日賀茂の競馬を　（第四十一段）

五月五日、賀茂の競馬（くらべうま）を見侍りしに、車の前に雜人立ちへだてて見えざりしかば、おの〳〵下りて埒のきはに寄りたれど、ことに人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなるあふちの木に、法師の登りて、木のまたについゐてもの見るあり。取りつきながらいたうねぶりて、落ちぬべき時に目をさますことたび〳〵なり。

○ついゐて
○あざみ
○しれもの

これを見る人、あざけりあざみて「世のしれものかな。かく危き枝の上にて、安き心ありてねぶるらむよ」といふに、わが心にふと思ひしまゝに

○もとも
○艶なる

「われらが生死の到來たゞ今にもやあらむ。それを忘れてもの見て日をくらす、おろかなることはなほまさりたるものを」といひたれば、前なる人ども「まことにさにこそ候ひけれ。もともおろかに候」といひて、皆うしろを見かへりて「こゝへ入らせ給へ」とて、ところを去りて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひ寄らざらむなれども、折からの思ひかけぬこゝちして、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。

一八　春の暮つ方　（第四十三段）

春の暮つ方、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥ふかく、木立もの、ふりて、庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子皆おろして、さびしげなるに、東にむきて、妻戸のよきほどに開

○うちとけ
○心にくく

きたる、み簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年二十ばかりにて、うちとけたれど心にくくのどやかなるさまして、机の上に書をくりひろげて見居たり。いかなる人なりけむ、たづね聞かまほし。

○ゆゑづき
○そぼち
○えならず

一九　あやしの竹の編戸の内より　（第四十四段）

あやしの竹の編戸の内より、いと若き男の、月影に色あひさだかならねど、つやゝかなる狩衣に、こき指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、はるかなる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつつわけ行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かむかた知らまほしくて、見おくりつゝ行けば、笛を吹きやみて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。

○空たきもの
○追風

○かごとがましく

榻にたてたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問へば「しか〳〵の宮のおはしますころにて、御佛事などさぶらふにや」といふ。御堂の方に法師どもまゐりたり。夜寒の風にさそはれくる空たきものにほひも、身にしむ心地す。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず、心づかひしたり。

心のまゝにしげれる秋の野らは、おきあまる露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲のゆきもはやき心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。

二〇　ある人清水へ　（第四十七段）

ある人、清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すが

ら「くさめ〳〵」といひもて行きたれば「尼御前、何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、いらへもせず、なほいひ止まざりけるを、たび〳〵とはれて、うち腹立ちて「やゝ、はなひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、養君の、比叡の山に兒にておはしますが、たゞ今もやはなひ給はむと思へば、かく申すぞかし」といひけり。ありがたき志なりけむかし。

○はなひる
○ありがたき

二一　老來りて始めて　（第四十九段）

老來りて、始めて道を行ぜむと待つことなかれ。古き塚多くはこれ少年の人なり。はからざるに病を受けて、忽ちにこの世を去らむとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれる事は知られ。あやまりといふは他の事にあらず、速かにすべき事を緩くし、緩くすべきことを急ぎて、過ぎにし事の悔しきなり。その時悔ゆともかひあらむや。

二二　仁和寺にある法師　（第五十二段）

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うくおぼえて、ある時思ひたちて、たゞひとりかちより詣でけり。極樂寺・高良など拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。さてかたへの人にあひて「年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、たふとくこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに、山へ登りしは何ごとかありけむ、ゆかしかりしかど、神へ參ることそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきわざなり。

仁和寺　京都の西郊。
石清水　石清水八幡。
○かちより
極樂寺高良　石清水八幡の末社。
○ゆかし

二三　これも仁和寺の法師　（第五十三段）

これも仁和寺の法師、童の法師にならむとするなごりとて、おの〳〵遊

○かづき
○大かた
○ことさめ
○とかく
○くすし
○がり
○ねて

ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、かたはらなる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座興に入ること限なし。しばしかなでて後、抜かむとするに大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむとまどひけり。

とかくすれば頸のまはりかけて、血たり、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、うちわらむとすれど、たやすくわれず、ひゞきて堪へ難かりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上にかたびらをうちかけて、手を引き杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行きけるに、道すがら人のあやしみ見ること限なし。

○ことやう
○かけうげ
○からき

醫師のもとにさし入りてむかひ居たりけむ有様、さこそことやうなりけめ。ものをいふもくゞもり聲にひゞきて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、また仁和寺にかへりて親しきもの、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらむともおぼえず。

かゝるほどに、あるもののいふやう「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ。たゞ力を立てて引き給へ」とて、藥のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちぎるゝばかりに引きたるに、耳鼻かけうげながらぬけにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

○あいなし
○つぎざま
○あからさま
○らうがはし

二四　久しく隔たりてあひたる人　（第五十六段）

久しく隔たりてあひたる人の、わが方にありつること、かず〳〵に殘りなく語りつゞくるこそあいなけれ。隔てなくなれぬる人も程へて見るは恥かしからぬかは。

つぎざまの人は、あからさまにたち出でても、けふありつることとて、息もつきあへず語り興ずるぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出でて、見ることのやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。

をかしきことをいひてもいたく興ぜぬと、興なきことをいひてもよく

○品
○ざえ
○わびし
○かたはらいたく
○ながら
○沙汰

笑ふにぞ、品のほどははかられぬべき。人のみざまのよしあし、ざえある人はその事など定めあへるに、おのが身にひきかけていひ出でたる、いとわびし、

二五　人の語り出でたる歌物語　（第五十七段）

人の語り出でたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ。すこしその道知らむ人は、いみじと思ひては語らじ。すべていとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく、聞きにくし。

二六　大事を思ひ立たむ人　（第五十九段）

大事を思ひ立たむ人は、去り難く心にかゝらむことの本意を遂げずして、さながらすつべきなり。しばしこの事果てて、同じくは彼の事沙汰

○したゝめ　○えさらぬ　○おほやう　○あらまし

し置きて、しか〳〵の事、人の嘲やあらむ、行末難なくしたゝめまうけて、年ごろもあればこをあれ、その事待たむ程あらじ、物さわがしからぬやうに、など思はむには、えさらぬ事のみいとゞかさなりて、事の盡くるかぎりもなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう人を見るに、少し心あるきはは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。

近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身を助けむとすれば、恥をもかへりみず、財をも捨てて遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の來る事は、水火の攻むよりも速かに遁れ難き、ものを、其の時老いたる親、いとけなき子、君の恩、人の情、すてざらむや。

二七　名を聞くより　（第七十一段）

○やがて　○たそへ

名を聞くよりやがておもかげはおしはからるゝ心地するを、見る時はまたかねて思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家のそこほどにてぞありけむとおぼえ、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかくおぼゆるにや。又いかなる折ぞ、たゞ今人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心の中も、かゝることのいつぞやありしがとおぼえて、いつとは思ひ出でねど、まさしくありし心地のするは、われば かりかく思ふにや。

二八　世に語り傳ふること　（第七十三段）

○あいなき　○そらごと

世に語り傳ふること、まことはあいなきにや、多くは皆そらごとなり。あるにも過ぎて人はものをいひなすに、まして年月過ぎ、境もへだたりぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとゞめぬれば、やがて定

○いみじき
○かたくな
○そゞろに

まりぬ。

道々のものの上手のいみじきことなど、かたくなる人の、その道知らぬは、そゞろに神の如くにいへども、道知れる人は、更に信も起さず。音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。

○かつ
○うきたる
○をごめき
○げに〳〵しく
○おぼめき
○あらがふ

かつあらはるゝをもかへりみず、口にまかせていひちらすは、やがてうきたることと聞ゆ。又われもまことしからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどをごめきていふは、その人のそらごとにはあらず。げに〳〵しく、ところ〴〵うちおぼめき、よく知らぬよししして、さりながらつま〴〵合せて語るそらごとは、おそろしき事なり。わがため面目あるやうにいはれぬるそらごとは、人いたくあらがはず。皆人の興ずるそらごとは、ひとり「さもなかりしものを」といはむも詮なくて、聞きゐたるほどに、證人にさへなされて、いとゞ定まりぬべし。

○下ざま
○ねんごろに
○をこがましし
○あひしらひ

とにもかくにもそらごと多き世なり。たゞ常にある、めづらしからぬことのまゝに心得たらむ、よろづ違ふべからず。下ざまの人の物語は、耳驚くことのみあり。よき人はあやしきことを語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗のそらごとを、ねんごろに信じたるもをこがましく「よもあらじ」などいふも詮なければ、大方はまことしくあひしらひて、ひとへに信ぜず、また疑ひあざけるべからず。

二九　世のおぼえ花やかなる　（第七十六段）

○とぶらふ
○うとく
○ありなむ

世のおぼえ花やかなるあたりに、なげきもよろこびもありて、人多く行きとぶらふなかに、ひじり法師のまじりて、いひ入れ、たゝずみたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなむ。

○もてあつかひぐさ
○いろふ
○あない
○うけられね
○かたほとり

三〇　世の中にその頃　（第七十七段）

世の中にその頃人のもてあつかひぐさにいひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、よくあないしりて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたること、うけられね。ことにかたほとりなるひじり法師などぞ、世の人の上はわが如く尋ね聞き、いかでかばかりは知りけむとおぼゆるまでぞ、いひちらすめる。

○今やう
○もてなす
○ことふり
○心にくし
○今さら
○ことぐさ

三一　今やうの事どもの　（第七十八段）

今やうの事どものめづらしきを、いひひろめもてなすこそ、またうけられね。世にことふりたるまで知らぬ人は、心にくし。今さらの人などある時、こゝもとにいひつけたることぐさ、ものの名など、心得たるどち、かたはしいひかはし、目見あはせ笑ひなどして、心しらぬ人にこゝろえず思はすること、世なれずよからぬ人の、必ずあることなり。

○入りたゝぬ
○さしいらへ
○かたくな

三二　何事も入りたゝぬさましたる　（第七十九段）

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は、しりたる事とてさのみ知り顔にやはいふ。片田舎よりさしいでたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ、されば世にはづかしきかたもあれど、自らもいみじと思へるけしきかたくななり。よくわきまへたる道

には、かならず口おもく、問はぬかぎりはいはぬこそいみじけれ。

三三　屏風障子などの繪　（第八十一段）

屏風・障子などの繪も文字も、かたくななる筆樣して書きたるが見にくきよりも、宿のあるじのつたなくおぼゆるなり。大方もてる調度にても、心おとりせらるゝことはありぬべし。さのみよきものをもつべしとにもあらず。損せざらむためとて、品なく見にくきさまにしなし、めづらしからむとて、用なきことどもしそへ、わづらはしく好みなせるをいふなり。ふるめかしきさまにていたくこと〴〵しからず、費もなくて、ものがらのよきが、よきなり。

○つたなく
○心おとり
○こと〴〵し

三四　法顯三藏　（第八十四段）

法顯三藏の、天竺にわたりて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を願ひけることを聞きて「さばかりの人の、むげにこそ心よわきけしきを人の國にて見え給ひけれ」と人のいひしに、弘融僧都「優になさけありける三藏かな」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくゝおぼえしか。

○法顯三藏晉の安帝の時天竺に渡つた。
○むげに
○見え
○心にくし

三五　ある人弓射ることを　（第九十二段）

ある人、弓射ることをならふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく「初心の人二つの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいま

○なほざり

しめ、萬事にわたるべし。

道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねてねんごろに修せむことを期す。いはむや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞたゞ今の一念において、たゞちにすることの甚だ難き。

○ねんごろ

三六　高名の木のぼり　（第百九段）

○掟て

高名の木のぼりといひし男、人を掟てて、高き木にのぼせて、梢を切らせしに、いとあやふく見えしほどはいふ事もなくて、おるゝ時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」とことばをかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるともおりなむ。いかにかくはいふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき枝あやふきほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。過はやすき所になりて必ず仕ることに候」といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も難き所を蹴出して後やすく思へば、必ず落つると侍るやらむ。

○目くるめき

三七　宿河原といふ所にて　（第百十五段）

宿河原といふ所にて、ぼろ〳〵多く集りて、九品の念佛を申しけるに、外より入りくるぼろ〳〵の「もしこの御中に、いろをし坊と申すぼろやおはします」と尋ねければ、その中より「いろをしこゝに候。かくのたまふは誰そ」と答ふれば、「しら梵字と申すものなり。おのれが師なにがしと申しし人、東國にていろをしと申すぼろに殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、うらみ申さばやと思ひて、尋ね申すなり」といふ。

○ゆゝしく
○あなかしこ
○わきざし
○みつぎ
○心ゆく
○なづむ

いろをし、「ゆゝしくも尋ねおはしたり。さること侍りき。こゝにて對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。前の河原へまゐりあはむ。あなかしこ、わきざしたち、いづ方をもみつぎ給ふな。數多のわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし」といひ定めて、二人河原へ出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて共に死にけり。

ぼろ〳〵といふもの、昔はなかりけるにや。近き世に、ぼろんじ、梵字、漢字などいひける者、そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるに似て我執ふかく、佛道を願ふに似て鬪諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして少しもなづまざる方のいさぎよくおぼえて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。

○さらぬ
○むづかし
○むね
○たより

三八　寺院の號　（第百十六段）

寺院の號、さらぬよろづのものにも、名をつくること、昔の人は少しも求めず、たゞありのまゝにやすくつけけるなり。この頃は深く案じ、才覺をあらはさむとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、目なれぬ文字をつかむとする、益なきことなり。何ごともめづらしきことを求め、異說を好むは、淺才の人の必ずあることなりとぞ。

三九　人の才能は　（第百二十二段）

人の才能は、文あきらかにして、ひじりの教を知れるを第一とす。次には手かく事、むねとすることはなくとも、これを習ふべし。學問にたよりあらむためなり。次には醫術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝

○いたづら

のつとめも、醫にあらずばあるべからず。次に弓い、馬に乘ること、六藝に出せり。必ずこれをうかゞふべし。文・武・醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。

次に食は人の天なり。よく味を調へ知れる人、大いなる德とすべし。

次に細工、よろづに用多し。この外のことども、多能は君子の恥づるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世には、これをもちて世を治むること、やうやくおろかなるに似たり。金(こがね)はすぐれたれども、鐵(くろがね)の益多きに如かざるがごとし。

四〇　ものに爭はず

（第百三十段）

ものに爭はず、おのれを枉げて人に從ひ、わが身を後にして、人を先にするには如かず。よろづの遊にも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむためなり。おのれが藝のまさりたる事をよろこぶ。されば、負けて興なくおぼゆべきこと、また知られたり。われ負けて人をよろこばしめむと思はば、更に遊の興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰まむこと、德にそむけり。

むつまじき中にたはぶるゝも、人をはかりあざむきて、おのれが智のまさりたることを興とす。これまた禮にあらず。されば、はじめ興宴よりおこりて、長き恨を結ぶたぐひ多し。これ皆あらそひを好む失なり。人に勝らんことを思はば、學問して、その智を人にまさらむと思ふべし。道を學ぶとならば、善にほこらず、ともがらに爭ふべからずといふこと

を知るべき故なり。大きなる職をも辭し、利をもすつるは、たゞ學問の力なり。

○たれこめ

四一　花はさかりに　（第百三十七段）

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見所多けれ。歌のことばがきにも「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも「さはることありてまからで」なども書けるは「花を見て」といへるにおとれることかは。花の散り、月のかたぶくをしたふならひはさることなれど、ことにかたくななる人ぞ「この枝かの枝散りにけり。今は見どころなし」などはいふめる。

○もがな

○さのみ

○あからめ

望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴・しらかしなどの、ぬれたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜はねやの中ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。よき人はひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢよりも、立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きなる枝、

こゝろなく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

○わりなく

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見事いと遅し、その程は、桟敷不用なり」とて、奥なる屋にて酒飲み、ものくひ、圍碁・雙六など遊びて、桟敷には人をおきたれば、「渡り候」といふ時に、おの〳〵肝つぶるゝやうに爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾はり出でて、押しあひつゝ、一事も見もらさじとまもりて、とありかゝりと、ものごとにいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らむまで」といひておりぬ。たゞものをのみ見むとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ず。若く末々なるは宮仕にたちゐ、人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。

○ゆかしき

○らうがはし

何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明けはなれぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それかかれかなど、思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。をかしくも、きら〳〵しくも、さま〳〵に行きかふ、見るもつれ〳〵ならず。暮るゝほどには、立てならべつる車ども、所なくなみゐつる人も、いづ方へ行きつらむ、ほどなく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば簾・たゝみもとり拂ひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。

四二　家にありたき木　（第百三十九段）

家にありたき木は松・櫻。松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八

○ことやう
○こちたく
○ありなむ
○すさまじ
○むづかし

重櫻は奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、みな一重にてこそあれ。八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありなむ。おそ櫻、またすさまじ。蟲のつきたるもむづかし。

○にほひ
○めでたき
○をかし
○けおされ
京極入道藤原定家。

梅は白き、うす紅梅。ひとへなるがとく咲きたるも、かさなりたる紅梅のにほひめでたきも、みなをかし。おそき梅は櫻に咲きあひて、おぼえ劣り、けおされて枝にしぼみつきたる、心うし。「ひとへなるがまづ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなむ軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二もと侍るめり。

柳またをかし。卯月ばかりのわか楓、すべてよろづの花紅葉にもまさりてめでたきものなり。橘・かつら、いづれも木はものふり大きなるよし。草は山吹・藤・かきつばた・なでしこ。池にははちす。秋の草は荻・薄・桔梗・萩・女郎花・ふぢばかま・紫苑（しをに）・われもかう・刈萱・りんだう・菊・黄菊も。蔦・葛・朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなるが、垣に繁からぬよし。この外世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。おほかた、何もめづらしくありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。

○ありがたき
○なくてありなむ

さやうのもの、なくてありなむ。

四三　身死して財のこるは　（第百四十段）

○つたなく
○はかなし
○こちたく

身死して財のこるは、智者のせざるところなり。よからぬもの蓄へ置きたるもつたなく、よきものは、心をとめけむと、はかなし。こちたく多かる、まして口惜し。我こそ得めなどいふものどもありて、あとに爭ひ

○生けらむ
○物こそあらめ
○ものし

たる、さまあし。後は誰にと志すものあらば、生けらむうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらむ物こそあらめ、その外は、何も持たでぞあらまほしき。

四四　心なしと見ゆるもの　（第百四十二段）

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。あるあらえびすのおそろしげなるが、かたへにあひて「御子はおはすや」と問ひしに「一人ももち侍らず」と答へしかば「さてはもののあはれは知り給はじ、情なき御心にぞものし給ふらむと、いとおそろし。子ゆゑにこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ」といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝる者の心に慈悲ありなむや。

○するすみ
○ほだし
○むげに
○かなし
○つみなふ
○不便

孝養の心なきものも、子もちてこそ親の志は思ひ知らるれ。世をすてたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ、望ふかきを見て、むげに思ひくたすは、ひがごとなり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからむ親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗をもしつべき事なり。されば盗人をいましめ、ひがごとをのみ罪せむよりは世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。

人、恒の産なき時は、恒の心なし。人きはまりて盗す。世治まらずして、凍餒のくるしみあらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それをつみなはむこと、不便のわざなり。さて、いかゞして人を惠むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で、農をすゝめば、下に

利あらむこと疑あるべからず。衣食世の常なる上にひがごとせむ人をぞ、まことのぬす人とはいふべき。

○つかむ
○なまじひに
○心にくし

四五　能をつかむとする人　（第百五十段）

能をつかむとする人「よくせざらむほどは、なまじひに人に知られじ、うち〳〵よくならひ得て、さし出でたらむこそ、いと心にくからめ」と常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得ることなし。

○かたほ
○つれなく
○骨なし

未だ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、そしり笑はるゝにも恥ぢず、つれなくすきてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして、年をおくれば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳たけ、人にゆるされて、ならびなき名を得ることなり。天下のものの上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり、むげの瑕瑾もありき。されども、その人、道のおきて正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、諸道かはるべからず。

○あいなく
○めやすく
○ゆかしく

四六　ある人のいはく　（第百五十一段）

ある人のいはく、年五十になるまで上手に至らざらむ藝をばすつべきなり。勵み習ふべき行末もなし。老人のことをば、人もえ笑はず。衆に交はりたるも、あいなく見ぐるし。大方よろづのしわざはやめて、いとまあることそめやすく、あらまほしけれ。世俗の事にたづさはりて、生涯をくらすは下愚の人なり。ゆかしくおぼえむことは、學び聞くとも、そのおもむきを知りなば、おぼつかなからずしてやむべし。もとより望む事なくしてやまむは、第一のことなり。

○さかひ

四七　世にしたがはむ人は　（第百五十五段）

世にしたがはむ人は、まづ機嫌を知るべし。ついであしきことは、人の耳にもさかひ、心にも違ひて、その事成らず。さやうの折節を心得べきなり。たゞし病をうけ、子うみ、死ぬる事のみ、機嫌をはからず、ついでありしとて止むことなし。生住異滅の移り變る、まことの大事は、たけき河の漲り流るゝが如し。しばしも滯らず、直に行ひゆくものなり。されば眞俗につけて、かならず果し遂げむと思はむことは、機嫌をいふべからず。とかくの用意なく、足を踏みとゞむまじきなり。

春暮れて後夏になり、夏はてて秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣をもよほし、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小

○つはる
○あらぬ道
○むしろ
○よに

春の天氣、草も靑くなり、梅も莟みぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちてめぐむにはあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下にまうけたる故に、待ちとるついで甚だ早し。生老病のうつり來ること、またこれに過ぎたり。四季はなほ定まれるついでありて、死期はついでを待たず。死は前よりしも來らず、かねて後に迫れり。人みな死あることを知りて、待つ事しかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の滿つるが如し。

四八　一道にたづさはる人　（第百六十七段）

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろにのぞみて「あはれ、わが道ならましかば、かくよそに見侍らじものを」といひ、心にも思へる事、常の事なれど、よにわろく覺ゆるなり。知らぬ道のうらやましくおぼえば「あな

うらやまし。などか習はざりけむ」といひてありなむ。

わが智を取り出でて人に爭ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみ出すたぐひなり。人としては善に誇らず、ものと爭はざるを德とす。他にまさる事のあるは大きなる失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人に勝れりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそいはねども、內心にそこばくのとがあり。愼みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、おのづから明かにその非を知るが故に、志常に滿たずして、遂にものに誇ることなし。

○をこ
○いひけたる

四九　年老いたる人の　（第百六十八段）

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて「この人の後には誰にか問はむ」などいはるゝは、老のかたうどにて生けるもいたづらならず。さはあれど、それもすたれたるところのなきは、一生このことにて暮れにけりと、つたなく見ゆ。「今は忘れにけり」といひてありなむ。

大かたは、知りたりともすゞろにいひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え「おのづからあやまりもありぬべし。さだかにもわきまへ知らず」などいひたるは、なほまことに道のあるじともおぼえぬべし。まして、知らぬこと知りがほに、おとなしくもどきぬべくもあらぬ人のいひ聞かするを、さもあらずと思ひながら聞きゐたる、いとわびし。

○かたうど
○すたれ
○つたなく
○すゞろに
○おとなしく
○もどき
○わびし

五〇　さしたる事なくて　（第百七十段）

○がり
○むづかし
○心づきなし
阮籍　晉の竹林の七賢の一人。

さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、そのことはてなば、とく歸るべし。久しくゐたる、いとむづかし。人とむかひたれば、言葉多く、身もくたびれ、心もしづかならず、よろづのことさはりて、時をうつす。互のため益なし。いとはしげにいはむもわろし。心づきなき事あらむ折は、なか〳〵そのよしをもいひてむ。同じ心にむかはまほしく思はむ人の、つれ〴〵にて「今しばし。けふは心静かに」などいはむは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。その事となきに人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も「久しく聞えさせねば」などばかりいひおこせたる、いとうれし。

五一　相模守時頼の母　（第百八十四段）

○けいめい

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝことありけるに、すゝけたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切り廻しつゝ張られければ、兄の城介義景、その日の經營（けいめい）して候ひけるが「たまはりて、なにがし男に張らせ候はむ。さやうのことに心得たるものに候」と申されければ「その男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、なほ一間づゝ張られけるを、義景「みなを張りかへ候はむは、はるかにたやすく候べし。まだらに候も見ぐるしくや」と、かさねて申されければ「尼も、後はさは〳〵と張りかへむと思へども、けふばかりは、わざとかくてあるべきなり。ものは破れたる所ばかりを修理して用ふることぞと、若き人に見ならはせて、心づけむためなり」と申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約をもととす。女性なれども、聖人の心に通へり。天下を保つほどの人を子にてもたれける、まことにたゞ人に

はあらざりけるとぞ。

五二　よろづの道の人　（第百八十七段）

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさることは、たゆみなくつゝしみて、かろ〳〵しくせぬと、ひとへに自由なるとのひとしからぬなり。藝能・所作のみにあらず、大かたのふるまひ、心づかひも、おろかにしてつゝしめるは、得のもとなり。たくみにしてほしきまゝなるは、失のもとなり。

○非家

五三　けふはその事を　（第百八十九段）

けふはその事をなさむと思へど、あらぬいそぎまづいで來てまぎれ暮し、待つ人はさはりありて、たのめぬ人は來り、頼みたるかたのことはた

○あらぬ
○たのめぬ

がひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつることはことなくて、やすかるべきことはいと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年のこともかくの如し。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし、皆たがひゆくかと思ふに、おのづからたがはぬこともあれば、いよ〳〵ものは定め難し。不定と心得ぬるのみ、まことにてたがはず。

○あらまし

五四　達人の人を見る眼は　（第百九十四段）

達人の人を見る眼は、少しもあやまるところあるべからず。たとへば、ある人の、世にそらごとをかまへ出して、人をはかることあらむに、すなほにまことと思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。あまり深く信を起して、なほわづらはしく、そらごとを心得そふる人あり。又何としも

○おぼつかなく

○つや〳〵
○さるめり
○とかく

思はで心をつけぬ人あり。又いさゝかおぼつかなくおぼえて、たのむにもあらず、たのまずもあらで、案じゐたる人あり。又まことしくはおぼえねども、人のいふことなれば、さもあらむとて、やみぬる人もあり。又さま〴〵に推し、心得たるよししして、かしこげにうちうなづき、ほゝゑみてゐたれど、つや〳〵知らぬ人あり。又推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほあやまりもこそあれと、あやしむ人あり。又ことなるやうもなかりけりと、手をうちて笑ふ人あり。又心得たれども、知れりともいはず、おぼつかなからむは、とかくのことなく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。又このそらごとの本意を、はじめより心得て、少しも欺かず、かまへ出したる人と同じ心になりて、力を合する人あり。愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にては、このさま〴〵の得たる所、詞にても顔にても、かくれなく知られぬべし。まして明かならむ人の、まどへるわれらを見むこと、掌の上のものを見むがごとし。

○思ひわく

五五　秋の月は　（第二百十二段）

秋の月はかぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひわかざらむ人は、むげに心うかるべきことなり。

最明寺入道北條時頼。
○やがて
○とかく
○ことやう
○なえ
○たうべ
○さう〳〵し

五六　平宣時朝臣　（第二百十五段）

平宣時朝臣、老の後、昔語に「最明寺入道、ある宵のまに、よばるゝことありしに「やがて」と申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、又使來りて「直垂などのさぶらはぬにや。夜なれば、ことやうなりとも、疾く」とありしかば、なえたる直垂、うち〳〵のまゝにてまかりたりしに、銚子に土器とりそへてもて出でて「この酒を一人たうべむがさう〳〵しければ、申

○さりぬべき
○さし
○つきたる

しつるなり。有こそなけれ。人は靜まりぬらむ。さりぬべきものやあると、いづくまでも求め給へ」とありしかば、紙燭さしてくまなくを求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて「これぞ求め得て候」と申ししかば「こと足りなむ」とて、心よく數獻に及びて興に入られ侍りき。其の世にはかくこそ侍りしか」と申されき。

○わかず
○ことうるはし
○所得たる

五七　よろづのとがあらじと　（第二百三十三段）

よろづのとがあらじと思はば、何事にもまことありて、人をわかずうやうやしく、詞少からむにはしかじ。男女老少、みなさる人こそよけれども、ことに若く、かたちよき人の、ことうるはしきは、忘れがたく思ひつかるゝものなり。よろづのとがは、馴れたるさまに上手めき、所得たるけしきして、人をないがしろにするにあり。

○おとなし
○なまし

五八　人のものを問ひたるに　（第二百三十四段）

人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝにいはむはをこがましとにや、心まどはすやうにかへりごとしたる、よからぬ事なり。知りたることも、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。またまことに知らぬ人もなどかなからむ。うらゝかにいひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし。

○あさまし
○心づきなし

人は、未だ聞き及ばぬことを、わが知りたるまゝに「さてもその人の事のあさましさ」などばかりいひやりたれば「いかなる事のあるにか」とおし返し問ひにやることこそ、心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすあたりもあれば、おぼつかなからむやうに告げやりたらむ

あしかるべきことかは。かやうのことは、もの馴れぬ人のあることなり。

○すゞろなる
○せかれ
○所得がほ
○けしからぬ
○そこばく

五九　ぬしある家には　（第二百三十五段）

ぬしある家には、すゞろなる人、心のまゝに入りくることなし。あるじなき所には、道ゆく人みだりに立ち入る。狐・梟やうのものも、人げにせかれねば、所得がほに入り住み、こだまなどいふ、けしからぬかたちもあらはるゝものなり。又鏡には色形なき故に、よろづの影來りてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虛空よくものを容る。われらが心に、念々のほしきまゝに來り浮ぶも、心といふもののなきにやあらむ。心に主あらましかば、胸の中にそこばくのことは入り來らざらまし。

○大社
出雲大社
○しる
○いざたまへ
○ゆゝしく
○むげなり
○つと
○ゆかしがり
○おとなしく

六〇　丹波に出雲といふ所　（第二百三十六段）

丹波に出雲といふ所あり。大社をうつして、めでたく造れり。しだのなにがしとかやしる所なれば、秋の頃、聖海上人その外も、人あまた誘ひて「いざたまへ、出雲をがみに。かいもちひめさせむ」とて、具してゆきたるに、おの〳〵をがみて、ゆゝしく信をおこしたり。

御前なる獅子・狛犬（こまいぬ）、そむてきうしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて「あなめでたや。この獅子の立ちやう、いとめづらし。深き故あらむ」と涙ぐみて「いかに殿ばら。殊勝のことは御覽じとがめずや。むげなり」といへば、おの〳〵あやしみて「まことに他に異なりけり。都のづとに語らむ」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知り

ぬべき顔したる神官を呼びて「この御社の獅子の立てられやう、定めて習あることに侍らむ。承らばや」といはれければ「その事に候。さがなきわらべどもの仕りける、奇怪に候ことなり」とて、さしよりてする直していにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

○さがなき

國文要抄

徒然草 終

語釋

一

【つれ〴〵】退屈。無聊。
【日ぐらし】終日。一日中。
【よしなしごと】たはいもないこと。つまらぬこと。
【そこはかとなく】何の目的もなく。これぞといふ意味もなく。
【物ぐるほし】氣違ひじみてゐる。

二

【いでや】いやもう。さても。
【めれ】「めり」の已然形。……やうだ。
【やんごとなき】尊い。
【一の人】攝政關白をいふ。
【たゞ人】攝政關白につぐ身分の人。
【ゆゝし】えらい。
【はふれ】おちぶれる。
【いみじ】えらい。
【ひたぶるの】こゝは「全くの」の意。
【なか〳〵】かへつて。
【あいぎやう】愛嬌。
【心劣り】見劣り。自分の心から見て相手の劣つてゐるをいふ。
【ざえ】才。學才。
【かけず】懸較べられず。てんで相手にもされず。
【けおさる】壓倒される。
【まことしき】まじめな。
【いたまし】こゝは、いたみ入る。

三

【ふつゝか】いゝ加減。おろそか。
【思ひとる】思ひ込む。
【さる方】さういふ方面に。

四

【住みはつ】住みおほせる。一所に安住する。
【こふなく】この上なく。

【めやすし】非難がない。
【さかゆく】榮えゆく。
【あらまし】もつてゐたいと望む意。
【あさまし】甚だなさけない。

五

【つきづきし】似合はしい。
【今めかし】現代風。
【たより】ぐあひ。
【うちある】ちよつと置いてある。
【おぼえ】こゝは「似る」の意。
【心にくし】おくゆかしい。
【えならぬ】一通りならぬ。なみ〳〵でない。
【わびし】不愉快だ。

六

【さすがに】しかし何といつても。
【たわゝ】たわむほどに。
【ことさめ】興さめる。

七

【しめやか】しんみり。物靜か。
【うらなく】かくす所なく。
【ものから】けれども。ものの。
【かこつ】ぐちをこぼす。不平をいふ。
【よしなしごと】たはいもないこと。つまらぬこと。
【ほどこそあらめ】……間はまだしも。……間はよからうが。
【まめやか】眞實。
【わびし】物足りずさびしい。

八

【山がつ】きこり。
【ひとふし】一かど。一應。
【いかにぞや】どうしたものだらう。
【けしき】こゝは「これぞと思ふほどのおもむき」の意。
【ならなく】「ならぬ」の延音。
【いさや】さあ、どんなものだらうか。自分にはわからぬの意。

【ことぐさ】こゝは言葉の意。

九

【目さむる】目のさめるやうな。珍しい。
【心づかひ】氣をくばること。

一〇

【さゝげ】こゝは、すくひ上げる、掬する等の意。
【かしがまし】やかましい。うるさい。
【むすび】掬する。
【ふすま】衾。夜着。

一一

【さるものにて】もつともな事だが。
【けしきだつ】樣子をあらはす。樣子にあらはれる。
【なまめかし】優美である。
【ことふり】事古り。古めかしくなる。
【おぼしき事】心に思ふ事がら。
【あぢきなき】つまらぬ。面白くない。
【すさび】なぐさみ。
【かいやる】掻き破る。

【をさ〳〵】ほとんど。
【すさまじき】時に合はず殺風景な。
【いそぎ】支度。準備。
【ことづくしく】仰々しく。大げさに。

一二

【御ぞう】御族。御一族。
【うしろみ】後見。こゝは攝政・關白をさす。
【あせ】こゝは衰へる意。
【かた】かたみ。

一三

【すさび】なぐさみ。
【やりすつ】破りすてる。

一四

【うつろひ】「うつり」の延音。
【ひきしたゝめ】整へる。片づける。
【あなかしこ】あゝ恐ろしい。
【うたて】いやだ。
【うとし】緣が遠い。關係がうすい。

【よしなしごと】たはいもないこと。
【けうとき】人も行かず氣味が惡い。
【さるべき】然るべき。こゝは命日といふやうな日をさす。
【こととふ】たづねる。
【よすが】たより。
【さるは】それで。
【かた】かたみ。

一五

【がり】許。
【ひが〳〵し】根性のねぢけてゐる。

一六

【ともある時】何か一寸した時。
【心おき】遠慮して。
【げに〳〵しく】尤らしく。まじめで。
【うとき】疎遠。

一七

【ついゐて】しやがんでゐて。
【あざみ】さげすむ。
【しれもの】馬鹿もの。

一八

【うちとけ】ゆつたりとくつろいだ態度をしてゐる。
【心にくく】おくゆかしく。

一九

【ゆゑづき】雅な。おもむきある。
【そぼち】ぬれる。
【えならず】一通りならず。並々でなく。
【空たきもの】何處でくゆらすともなくくゆらしてある薫物。
【追風】物の香を傳へて吹來る風。
【かごとがましく】かこちごとらしく鳴くをいふ。

二〇

【はなひる】くさめが出る。
【ありがたき】めづらしい。

二二

【かちより】徒歩にて。

【ゆかし】こゝは「見たい」の意。

二三

【かづき】あたまにかぶる意。
【大かた】全く。どうしても。
【ことさめ】興さめ。
【とかく】かうしたり、ああしたり。
【くすし】醫師。
【がり】許。
【ゐて】つれて。
【ことやう】異樣。
【かけうげ】かけて孔のあくこと。
【からき】こゝは助り難い意。

二四

【あいなし】おもしろくない。
【つぎざま】身分のいやしいこと。
【あからさま】かりそめ。
【らうがはし】みだりがはしい。
【品】身分。
【わびし】不愉快だ。

二五

【かたはらいたく】傍から見ても見苦しい。

二六

【さながら】そのまゝ。
【沙汰】これはかうときめること。
【したゝめ】整理する。
【えさらぬ】去り難き。避げられぬ。
【おほやう】大方。大體。
【あらまし】豫定。

二七

【やがて】すぐに。
【よそへ】比する。なぞらへる。

二八

【あいなき】おもしろくない。つまらない。
【そらごと】いつはり。うそ。
【いみじき】たいそうえらい。
【かたくな】頑愚。

【そゞろに】何となく。
【かつ】一方に。
【うきたる】根もないこと。
【をどめき】うどかして。
【げに〳〵しく】もつともらしく。
【おぼめき】ぼやかす。不分明にする。
【あらがふ】あらそふ。
【下ざま】下賤。
【ぬんどろに】裏心。しんみに。
【をこがましく】馬鹿らしく。
【あひしらひ】あしらひ。

二九

【とぶらふ】おとづれる。見舞ふ。
【うとく】疎遠。
【ありなむ】よからう。

三〇

【もてあつかひぐさ】語り草。話柄。
【いろふ】關係する。かゝづらふ。
【あない】案内。事情。
【うけられね】合點がゆかぬ。
【かたほとり】かたゐなか。

三一

【今やう】當世。現代。
【もてなす】取扱ふ。
【ことふり】ふるくなる。
【心にくし】おくゆかしい。
【今さらの人】こゝは、改まつた人の意。
【ことぐさ】言葉。

三二

【入りたゝぬ】立入らぬ。
【さしいらへ】返事。
【かたくな】頑愚。

三三

【つたなく】心の陋劣なること。
【心おとり】見おとり。こちらの心から見て先方の劣つてゐる意。

【ことゞ〳〵し】仰々しい。

三四

【むげに】大へん。甚だ。
【見え】「見られ」に同じ。口語では「見せ」といつてもよい。
【心にくし】おくゆかしい。

三五

【なほざり】等閑。いゝかげん。

三六

【掟て】人に言ひつけて。
【目くるめき】目がまはる。

三七

【ゆゝしく】こゝは「けなげにも」「殊勝にも」の意。
【あなかしこ】決して〳〵。
【わきざし】わきの人。
【みつぎ】助力する。
【心ゆく】滿足する。思ふ存分。
【なづむ】物に拘泥する。とらはれる。

三八

【さらぬ】さうでない。
【むづかし】いやだ。

三九

【むね】第一。重要。
【たより】便宜。
【いたづら】むだなことをすること。

四一

【たれこめ】簾をたれて部屋の中に閉籠ること。
【もがな】……あればいゝなあ。願へ望む意の助詞。
【さのみ】さうばかり。そんなに。
【あからめ】わきめ。よそみ。
【わりなく】むりに。
【ゆかしき】こゝは、車の中の人は誰かと知りたいの意。
【らうがはし】みだりがはし。

四二

【ことやう】異樣。風變り。

【こちたく】 仰々しく。うるさく。
【ありなむ】 よからう。
【すさまじ】 殺風景だ。
【むづかし】 いやだ。不愉快だ。
【にほひ】 色つや。
【めでたき】 結構な。
【をかし】 おもしろい。
【けおされ】 壓倒され。
【ありがたき】 めつたにない。
【なくてありなむ】 なくてもよからう。

四三

【つたなく】 いやしくて見苦しい。
【はかなく】 たよりない。
【こちたく】 うるさく。仰々しく。
【生けらん】 生きてゐる。
【物こそあらめ】 ……物はともかく。……物はまだしも。

四四

【ものし】 こゝは「ある」の意。
【するすみ】 無一物なること。
【ほだし】 絆。係累。
【むげに】 ひどく。
【かなし】 いとしい。
【つみなふ】 罪に行ふ。
【不便】 フビン。かはいさう。

四五

【つかむ】 つけむに同じ。こゝは、身につけよう。
【なまじひに】 なまはんか。
【心にくし】 おくゆかしい。
【かたほ】 不十分。未熟。
【つれなく】 平氣で。
【骨なし】 無器用である。

四六

【あいなく】 おもしろくなく。みつともない。
【めやすく】 非難なく。
【ゆかしく】 聞きたく。

四七

【さかひ】 さからひ。
【つはる】 芽ぐむ。もと衝張るの義。下から芽がきざして衝張る意。

四八

【あらぬ道】 專門外の道。
【むしろ】 席。場所。
【よに】 非常に。甚だ。
【をこ】 愚。
【いひけたる】 いひけなされる。惡口される。

四九

【かたうど】 片人。味方。
【すたれ】 すたれ衰へる。
【つたなく】 つまらなく。
【すゞろに】 むやみに。
【おとなしく】 年配もたけ、思慮もあつて。
【もどき】 非難する。
【わびし】 つらい。

【がり】 許。

五〇

【むづかし】 いやだ。不愉快だ。
【心づきなし】 氣に入らぬ。

五一

【けいめい】 接待。斡旋。饗應のとりなし。

五二

【非家】 その道の專門家ならぬ者。

五三

【あらぬ】 思ひがけぬ。
【たのめぬ】 あてにしてをらぬ。もとこちらに對して頼みに思はせぬ意。
【あらまし】 豫定。

五四

【おぼつかなく】 心もとなく。不安に。
【つや〳〵】 すこしも。
【さるめり】 その通りであるやうだ。
【とかく】 こゝは、どうのかうのいふこと。即ち格別

の事のないのをいふ。

五五

【思ひわく】 辨別する。けぢめを考へる。

五六

【やがて】 すぐに。
【とかく】 かれこれ。
【ことやう】 異樣。へんな樣子。
【なえ】 こゝは糊が落ちて柔かになる意。
【たうべ】 飲む。
【さうぐし】 さびしくものたりない。
【さりぬべき】 然るべき。それ相應の。こゝは何かさかなになりさうなの意。
【さし】 ともし。
【つきたる】 つけてある。少しばかり附けてある。

五七

【わかず】 わけへだてなく。差別をつけず。
【ことうるはし】 言葉づかひのきれいなこと。
【所得たる】 得意な。

五八

【おとなしく】 おだやかに。
【なまし】 「な」は現在完了助動詞「ぬ」の未然形。「まし」は推量の助動詞。「まし」を强めた形である。
【あさましさ】 あさましさよ。あきれたものですよ。
【心づきなし】 氣に喰はぬ。癪にさはる。

五九

【すゞろなる】 むやみな。用もない。
【せかれ】 妨げられ。
【所得がほ】 得意然とした樣子。
【けしからぬ】 怪しい。
【そこばく】 いろ〳〵。樣々。多く。

六〇

【しる】 領する。「しる所」は知行所。
【いざたまへ】 さあいらつしやい。誘ふ意の語。
【ゆゝしく】 ひどく。えらく。
【むげなり】 あんまりですね。
【つと】 みやげ。みやげ話。
【ゆかしがる】 知りたがる。
【おとなしく】 重厚で。おちついて。
【さがなき】 いたづらな。

語釋終

語釋

◆國文要抄叢書◆

増鏡　定價金廿錢
徒然草　定價金廿錢
玉かつま　定價金廿錢

近刊

平家物語
奥の細道
神皇正統記
枕草紙
琴後集
檀園文集
源氏物語

昭和八年十一月一日印刷
昭和八年十一月三日發行

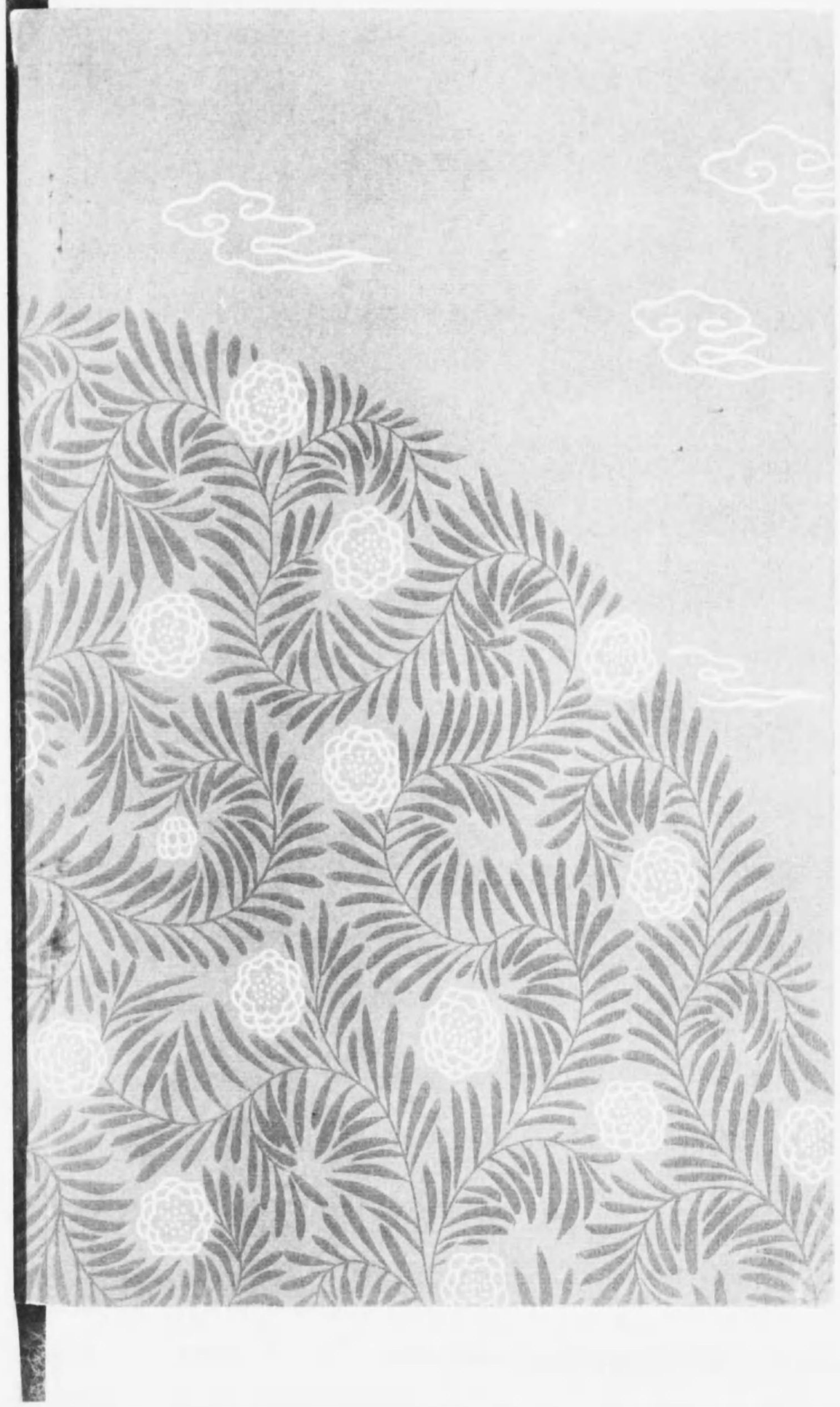
定價金貳拾錢

不許複製

著者　中等國漢文研究會
發行者　東京市神田區錦町三丁目廿四番地　若松壽男
印刷者
印刷所　東京市神田區錦町三丁目十二番地　正木印刷所

發行所　東京市神田區錦町三丁目廿四番地　西東社出版部
振替東京六九五七三番
電話神田二七八一番

西東社の受驗參考書

石井青水	最近の出題傾向による	漢文問題の解釋	四六判二四三頁 定價金八拾錢
藤野重次郎		國文の單語と解釋	四六判三〇〇頁 定價金八拾錢
藤野重次郎	學習受驗	作文問題と答案作成	四六判二五六頁 定價金七拾錢
千葉良夫	學習受驗	國文法の解說	四六判一五六頁 定價金參拾錢
近藤薫明	要點の着眼答案の要領	日本史の問題解釋	四六判四一二頁 定價金壹圓
石野勝五郎	最新研究	幾何の實力	四六判三九六頁 定價壹圓參拾錢
原顯一	各種受驗參考	算術問題の解法	四六判二六〇頁 定價金八拾錢
西東社編輯部		三角法の根柢と全問題の解法	四六判三六一頁 定價金壹圓
近藤源兒	最も分り易い中等程度の	化學の講義	新四六判三八四頁 定價壹圓五拾錢

終